

会 議 録

会議の名称		平成 30 年度第 8 回つくば市総合教育会議		
開催日時		平成 31 年 (2019 年) 1 月 24 日 (木) 13 時 00 分から 15 時 00 分まで		
開催場所		つくば市役所 5 階 庁議室		
事務局 (担当課)		総務部総務課		
出席者	委員	五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員、倉田教育委員		
	学校長	石川校長 (春日学園義務教育学校)、岡野校長 (谷田部中学校)、横山校長 (学園の森義務教育学校)、木村校長 (島名小学校)、大高校長 (手代木南小学校)		
	事務局	《総務部》藤後部長、吉沼次長 《総務課》中泉課長、奥沢課長補佐、荒澤課長補佐、高野係長、東泉主査、渡邊主任、鈴木主任 《教育局》森田局長、大久保次長 《教育総務課》貝塚課長、吉沼課長補佐、宇津野係長、青木係長 《教育指導課》根本課長、本松主査 (指導主事)		
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数	9 名
非公開の場合はその理由		—		
議題				
会 議 次 第	1	開会		
	2	市長挨拶		
	3	内容 オランダにおけるイエナプラン教育の視察報告		
	4	閉会		

様式第 1 号

<審議内容>

事務局：ただ今から、平成 30 年度第 8 回つくば市総合教育会議を開催いたします。本日は、お忙しいところ御出席いただきまして、ありがとうございます。開催に当たりまして、市長の五十嵐から御挨拶申し上げます。

市長：お疲れさまです。今日も、校長先生方にいらしていただきありがとうございます。今日は、イエナプランの報告を本松先生からしていただくということで、去年の 11 月に教育長、局長、副市長と本松先生というメンバーでオランダに行ってきました。予想はしていましたが、広島県が公立高校、中学校、小学校へのイエナプランの導入を表明しました。今までは、「日本では無理だ」、「オランダだからできるのだ」、「公立ではできない」等いろいろなことが国内でも言われてきましたが、やはり始めるところが出てきて、おそらくこれから一気に広まっていくだろうと思っています。物事のアプローチには二つあると思っています。一つは、真っ先に 1 番を狙って、目立つことをやる、「日本で最初に導入したのがつくばでした」と狙って進める事業というのがあります。ただ、私は、イエナプランに関しては、そういうことはすべきではないと思っています。もう一つのアプローチとして、「現場の先生方がどういうことをお感じになるか」や「つくばでどういうふうな形であれば、本当に子どもたちの学びにとっていいものになるか」ということをじっくり議論して、進めていくことが大事であろうと思っています。今、つくばも IT 等様々な日本で初めての事業をかなりやっていますが、イエナプランについては、急ぐものではなくて、こういった議論を積み重ねていって、大綱に書き込んでいく必要があるだろうと思っています。そういう意味でも、今日は、本松先生からのプレゼンを聞いて、その後先生方といろいろな意見交換をさせていただきながら、どういう可能性があるかというのを探っていく会議ができればと思います。教育長も配付されている資料に書かれていますので、後で説明していただくということで長丁場になりますが、どうぞよ

様式第1号

ろしくお願いします。

事務局：本日の会議は、お手元の次第に従って3時までを予定しています。今回の内容は、市長の御説明にもありましたとおり、オランダにおけるイエナプラン教育の視察報告です。限られた時間ではありますが、よろしく願いいたします。それでは、次第の3、内容に移ります。議事進行については、五十嵐市長にお願いしたいと思います。

市長：それでは、本松先生、プレゼンをお願いします。なかなか校長先生の前で話すというのも緊張すると思いますが、高校時代は1人でオーストラリアに行かれるぐらいですから大丈夫です。時間は自由に使ってください。よろしくお願いします。

本松指導主事：昨年11月4日から9日にオランダ、イエナプラン施設視察に随行させていただきました。本日は、視察の報告をさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。本日は、こちらの流れに沿ってお話をさせていただきます。まずイエナプランの概要です。身につけさせたい力として、こちらの七つが挙げられています。現地のイエナプラン協会を訪問した際には、先ほどの七つの力について、それぞれの力を子どもの具体的な姿で示した表をもとに説明を受けました。スライドにありますものが、その表になっております。教科学習は、七つの力を身につけるためのツールとして考えられています。教科で身につけた知識や技能を活用しながら、七つの力を育成していくという考え方です。次に、イエナプランで重視する点について御説明します。実際に体験させること、「昨日よりも今日はよくなった」というプラスの視点を持つこと、社会や世界について考えさせること、協働的な学び、クリティカルシンキング、目的意識を持たせることの6点です。学習、生活習慣についてお話しいたします。イエナプランでは、ファミリーグループを基盤、一つの学級のようなものとして、学校生活を送っています。一つのファミリーグループは、三つの異年齢集団、4から6、7から9、10から12歳

で構成されていることが多いようです。異年齢制の利点を生かし、家族のような環境をつくり、お互いに学び合うことで、社会性が身につくと考えられています。基本的には、子どもたちは、3年間同じ教室の同じ担任、イエナプランではグループリーダーと呼ばれる教師です。この担任のもとで生活をします。毎年年長者が上のクラスに進級し、年少者が入級してくるため、グループのメンバーはその年、その年で変わります。児童は、毎年異なる役割、年少、年中、年長を経験することで成長していきます。また、グループを構成する児童が替わるので、人間関係が固定しにくいという利点もあるようです。このことは、いじめや固定観念が生じることを防ぎ、個人の活躍の場を広げることに役立つとされています。続いて、イエナプランの柱となる基本の活動についてお話しいたします。サークル対話という車座になって対話をする活動を頻繁に取り入れており、児童に表現の場や振り返りの場が保障されています。こちらについては、後ほど御説明いたします。また、一緒に遊ぶことで、互いが自分にとって必要な存在であることを学び、自分自身について発見をされると考えられています。演劇づくり、音楽に合わせて体を動かす表現活動、そして教育上の効果を期待したゲーム活動などが含まれます。三つ目の学習についてですが、共働学習、そして、ワールドオリエンテーションと呼ばれる総合的な学習やつくばスタイル科のようなもの、個別学習を指します。こちらも後ほど御説明いたします。四つ目は、催しです。児童の表現の場や行事を指しています。ファミリーグループ単位での表現活動だけでなく、全校児童が集まって催しをすることもあります。週末は、学んだことを全体で共有したり、児童の発表を行ったりすることが多いようです。児童の発表は、クラスごとに順番に担当します。計画、準備、練習等も話し合いながら、児童主体で進められます。続いて、教室環境について、お話しいたします。イエナプラン校では、教室をリビングルームとして捉えています。各教室には、異年齢の子どもたちが、グループで学習を進められるように、壁に沿って机

がグループ型に配置されていることが多いようです。また、情報検索やドリル学習用のPCが各教室に配置されています。教室前面には、大型モニターやホワイトボードが備えられており、低学年グループでもデジタル教材も活用して、学習を進めていました。担任教師は、ホワイトボードを使って、子どもたちの考えを共有したり、読み書きの基本を教えたりしていました。各教室には、いつでもサークル対話が行えるようなスペースが設けられています。イェナプラン校では、ブロックアワー、教科学習と呼ばれるものとワールドオリエンテーション、プロジェクト型学習の二つの学習を通して、国のガイドラインに示された学力の定着を図っています。教科学習では、担任が1週間のその子の学習内容の大枠、学習する教科や量、一斉指導の時間帯などを決めます。その予定をもとに、児童はその週にやるべきことについて、自分で順序を決めながら、教科学習の時間割に書き入れます。低学年の子どもたちは、予定を立てるのが難しいので、こちらの写真のように、教師が決めたものが終わったときには、自分でチェックをするという形をとる場合もあるようです。学習の内容としては、読み取りや計算などのプリント学習をしていました。自分で決めた内容が早目に終わった場合には、次の課題を前倒しして進めます。終わらなければ、午後の教科の時間にも続けるという形をとっていました。こちらの写真は、教科学習の順番を児童自身が書き込んだ予定表です。終えたところには、児童なりに印をつけている様子が見られます。担任は、年齢や習熟度などのグループ単位で児童を集め、読み取りや計算の一斉指導を行います。あるグループが教師からの指導を受けている間、ほかの児童は各自の学習に取り組みます。異年齢の子どもから成るグループで学習しているため、分からないときには、互いに教え合いながら学習を進めます。多少の雑音は気にせずに進められるよう、トレーニングされているとのことでした。また、児童自身が集中できる環境で学習に取り組むことができます。廊下のスペースに移動したり、ヘッドホンをつけて学習をしたりなど、

児童によってさまざまです。教師は、各グループへの一斉指導が終わると、児童の様子を見て回り、個別指導に当たるとのことでした。ワールドオリエンテーションは、総合的な学習、つくばスタイル科のような学習で、イエナプランで重要な位置を占めます。イエナプラン教育では、社会、理科の内容がワールドオリエンテーションの中で総合的に学習されることが多いようです。あるテーマのもと、児童自身が問いを考えます。そして、課題の解決に向けての調査方法を考え、話し合います。調査の結果、得た情報を共有し、結果をプレゼンします。その後、発表内容とプレゼンの仕方について、自分自身を振り返るとともに、仲間や教師からフィードバックを受けます。この一連の流れで学習を続けるうちに、児童は自分に足りない知識や調査を進めるために必要な技能に気づきます。そのことにより、各児童の教科学習への目的、こういうことをするためにこれを学ぶ必要があるということが明確になるので、教科における学習意欲が向上する、そのため、ワールドオリエンテーションを通して、学力も向上すると考えられています。サークル対話はイエナプランの基本の活動の一つで、1日のさまざまな場面で見られます。例として、1日の始まりの予定確認、1日の終わりや活動、授業の後の振り返り、ワールドオリエンテーションでの計画、意見交換、発表などが挙げられます。教師主導で行われる場合もありますが、児童主導で行う場面も多く見られます。その場合、教師は、サークルに加わり、子どもたちの対話のファシリテーターの役割を担います。続いて、学習評価についてです。イエナプラン校では、数値による評価を行う代わりに、ポートフォリオ評価をしています。児童は自分の作品や学習成果を選びファイリングをします。教師はそれらを選んだ理由や何がうまくできたか、次はどのようにしたらよいかを児童に問い、児童とともに学習を振り返った後で家庭に持ち帰らせます。また、学校が国のガイドラインが目指す学力が身についているかどうかを測るために、統一テストを実施し、日々の指導に生かしているとのことでした。その他として、

イエナプラン校と一般の学校についてとイエナプラン校の多様性についてお話しいたします。イエナプラン校に通う児童の保護者は、教育に強い関心を持っているとのことでした。各学校の方針に理解を示しており、非常に協力的です。またイエナプラン校の卒業生が進学した中等教育学校からのフィードバックによると、イエナプラン校出身の生徒は、リーダーシップや自発性、自分の考えを持ち発言する力、共働して学習を進める力の点で、他校の生徒よりもすぐれていると言われているそうです。多様性についてですが、イエナプラン校の背景も様々であり、高学歴の保護者が多い学校もあれば、そうでない学校もあります。移民の多い学校も存在します。そのため、それぞれの実態に合わせて教育をする必要があります。以上がイエナプランの概要です。続きまして、訪問いたしました3校について御紹介いたします。こちらの学校は、238人の児童が在籍している農業地区にある学校です。地域からの通学が大半ですが、イエナプラン校への在籍を希望し、近隣の町から通学している児童もいます。児童は、保護者の送迎により8時半に登校し、2時45分に下校します。登下校の際に、保護者は担任と子どもの様子について話すことができます。宿題がないため、児童は下校後友達と遊んだり、スポーツクラブに通ったりしています。こちらの学校の先生方は、8時頃出勤し、4時半ごろ退勤するとのことでした。教師の児童への接し方から、児童一人一人を大切にしている印象を受けました。サークル対話の中では、どうしたらよいか、何が必要かと教師が児童に問いを投げかけ考えさせていました。児童に考えを持たせる場を与えているので、児童から様々な考えや意見が出ていました。また、安心して思いを伝えられる雰囲気できていました。イエナプランでは、教師が説明したり、答えを出したりすることは、児童の問い続ける姿勢を妨げると言われています。しかし、児童から多様な意見が出されるため、単なる意見交換に終始するのではなく、教師が見通しを持って導く場面も必要ではないのかと考えました。活動の終わりには、児童に各自の

取り組みを振り返らせ、よくできたところや改善すべきところを共有していました。こちらの学校の教科学習では、各自が集中して取り組める環境を選んでプリント学習を進めていました。ヘッドホンを着用したり、廊下に設置してある机で、友達と学習したりする児童もいました。教室でグループ内の児童に質問しながら学習を進める児童も見られました。児童同士のやりとりで、どの程度学びを深められるかについては、疑問も残りました。学習進度の遅い児童、早い児童に対して、個別に取り出して学習指導をする時間を設けていました。個別指導担当の教員がおり、担任と情報を共有し指導を行っていました。保護者に示す学習評価については、年2回のルーブリックを取り入れています。児童は学習の振り返りを書きます。数値としての通知表はなく、保護者も数値による評価を求めているとのことでした。こちらは、イエナプランスクールのモデル校とされているところです。日本からの視察も多い学校です。三つの分校で構成されていて、3校合わせると800人の児童が在籍しています。三つのこと、自分を知ること、お互いを知ること、学校環境を大切にすることを柱としながら、教育を進めていました。学校とは、世界、社会に出た際に必要になるスキルを学ぶための場と捉えられています。児童一人一人が集中して、読み取りや計算等のプリント学習に取り組んでいました。同じグループの仲間と相談しながら、問題を解く児童もいました。休み時間は、外で思い切り体を動かして遊び、授業開始時間になると、それぞれが自席に戻り、課題に取り組む等、みずから考えて行動する様子が見られました。教科学習に集中して取り組む態度や休み時間からの切りかえの早さ等が、学校全体に浸透しており、自主性においては、前日の訪問校よりも身につけているように感じました。保護者に示す学習評価として、面談前にポートフォリオを作成しています。子どもは自分がよく取り組めたもの、作品や学習プリントをファイリングします。面談シートには、学びの振り返りや成長を記入する欄、教師用と児童用があります。振り返りを記入後、ファ

イルを家に持ち帰ると、保護者がポートフォリオを見て面談で話したいことを面談シートに記入します。面談後、児童が今後の約束や目標を書き、学校生活に生かすという流れでポートフォリオを活用していました。教員研修にも力を入れているという説明がありました。教員の質の向上のために、研修やミーティングを計画的に行っています。毎週水曜日は午前中授業なので、研修を行うことができるということでした。3校ある分校とも研修を行っており、同じ学校の低中高ブロック、縦のつながりの研修、分校間の低中高ブロック、横のつながりでの研修があり、三つの学校に校長先生の経営理念が浸透するように努めていました。また、管理職が短い時間で教室を見て回り、教師のよかったところを日常的に伝えているそうです。児童に対してだけでなく、教師に対しても、よさを伸ばす意識で接しています。「今日より明日を良くしよう」という姿勢を大切にしていました。こちらの訪問校には、在籍児童180人、分校には240人の児童がおります。保護者から寄附を募り、遠足代、体育や音楽などの外部指導者代などに充てているとのことでした。イエナプラン校で学んでいる児童がどのように成長しているかを示したいという学校側の厚意で、10歳から12歳グループに所属している児童2人が学校を案内してくれました。学習の進度の遅い児童が学習できる教室が設置されており、個別指導担当の教師が配置されています。各ファミリーグループは、年に1回45分間の劇を全校の前で発表します。発表時期は2週間前に知られるので、担任と相談しながら、自分たちで計画を立て、役割を決め、練習を重ねながら作り上げていきます。この学校では、午前中は教科学習、午後はワールドオリエンテーションについての活動をする人が多いそうです。学習評価については、ポートフォリオ形式は行っていません。全国共通テストを参考に学習の補充をしていました。学校を案内してくれた2人の児童は、自分の言葉で学校のよさを伝えていました。児童が学校について、熱心に説明しようとする姿に、自分の学校に誇りを持っている様子が伝わってきました。

た。異学年で学ぶこと、グループになり、自分たちで学習を進めること、トラブルが起きても、まずは児童間で解決しようとするなど、イエナプランの柱となっている部分を学校が好きな理由として挙げていました。また、2人ともそれぞれの将来の夢、女の子はお医者さん、それから男の子は飲食店経営でしたが、夢についても話をしてくれました。学校生活において、普段から自分自身について考えたり、自分の良さや強みを認められたり、振り返ったりする場面が設定されているため、小学校段階から自分の生き方を考えられるようになるのだと感じました。児童に問いを持たせ、共働的な学びを展開し、振り返りを充実させながら学習を深める流れは、新学習指導要領の授業改善の視点とも共通します。また、イエナプランで育成を目指している力は、つくばスタイル科の7C学習に通じるものがあると感じました。このことから、大切なことは、目指す子ども像を学校全体で共有し、子どもに関わる全職員が同じ方向を向いて教育活動に関わることだと考えます。これは、現在でもふだんから各学校の先生方が目指し、実践されていることだと思います。児童が考える場、表現する場を意図的に設定すること、児童が自分の良さや得意分野に目を向けながら学習を進めること、振り返りの時間を活用して、学びを促すこと、一人一人の良い点を認めて伸ばすことなどを学校全体として浸透させることで、自己有用感を持ち、仲間と協力しながら課題解決に取り組める児童の育成につながるのではないのでしょうか。以上で報告を終わります。本日は、お時間をいただきありがとうございました。なお、11月7日、午後に訪問いたしましたイエナプラン協会での講話につきましては、お手元の資料の最後に掲載させていただきました。どうもありがとうございました。

市長：ありがとうございました。本松先生、よろしければテーブルについて、後で議論に参加してください。教育長からもレポート出してもらっているの、一旦教育長の報告もお願いできますか。その上で、質問や意見交換をお願いします。

したいと思います。

教育長：最初の3枚は、今、本松さんから説明があったことと基本的には同じで内容は重なっていますので、こちらは省略します。私が説明したいのは、4枚目です。実際に現場に行き、自分の目を見たことを雑駁に整理するとこうなりますということだけつけ加えておきたいと思います。イエナプラン教育を実践している学校を訪問して、校長の説明や聞き取りなどで知り得たことは、3枚目までにまとめていますが、実際に学校の中で、子どもの様子とか先生方に接して感じたことを6点挙げています。最初に訪問した学校で、我々が通されたのは「職員室」と呼ばれるところでした。先生方が、三々五々そこに集まって、コーヒーを飲んだり、紅茶を飲んだり、話し合ったりとか、あるいは昼はお弁当を食べたりというようなことをする場を「職員室」と呼んでいたところが、日本の職員室とは相当違うなというのが、最初の印象に残りました。そこで、校長先生から、我々も説明を受けました。

二つ目は、学校の規模は、大体200名から300名程度で、500名とか1,000名という学校はほとんどないということです。規模が小さいため、通学してくる子どもたちも割と近くに家があるとのことで、昼は自分の家に帰って食事をしてまた戻ってくるというような子どもも少なからずいました。

三つ目は、子どもたちそのものの様子を見ると、非常にのびのびしていて、あくせくした様子は見られない。本松さんの説明にもありましたが、ある学校で案内役を任された上級生の2人は、自分の言葉できちんと我々に説明するようなことを堂々とやっていました。「この学校に来るのは楽しいですか。」という質問をしたら、「何でそんな質問するのか。」というような顔で、「もちろんだ。」という答えが返ってきました。

四つ目、イエナプラン教育を実践している学校を丸めて私なりの印象を言えば、徹底して、子ども一人一人の特性、能力の違い、何を希望しているかという望みの違い、どうしようもないことをつもりなのかという意向や考え、

あるいは進度の違い、普段家でどのような過ごし方をしているかということなど、全てを丸めて尊重する。これらの違いを丸ごと認めて、その違いに応じた対応しようとしているということが非常によく分かりました。また、イエナプラン教育というのは、コンセプトであってメソッドではないということです。考え方に特徴があるのでこういうやり方をされていて、メソッドに特徴があるとは言えない。ただ、オランダでは200校ぐらいイエナプラン学校があるようですが、それぞれどのような教育をその中でやっているかということは、多様であるということもまた一つの特徴だろうと思います。

5番目、私なりの言い方をすれば、一人一人の能力や個性や価値観などの違いを丸ごと受け入れ、認めていて、それらのある一定の方向に矯正していく、直していくというのではなくて、ベクトルの違いをそのまま伸ばしてあげて、その延長で、その子なりの幸せなあるいはWell-beingな人生を全うさせるということをはっきりと意図しながら教育をしている。そうだとすれば、イエナプラン教育は、人類社会が目指すべき明日の教育を既に先取りしていると言えるのではないかということです。

6番目、このようなイエナプラン教育のコンセプトや具体的なやり方を我が国のガチガチの公教育、つくば市もその例外ではないと思っていますけれども、公教育の中にどう取り入れていくか。メソッドそのものよりも、考え方、コンセプトをどのようにしっかりと取り込んでいくかということが我々に課せられたことではないかと思います。滞在中に、こういうようなことはつくば市でも導入できるのではないかということ具体的に考えていますけれども、それを先走って私が言うことは今の段階では差し控えた方がいいのではないかと思いますけれども、イエナプラン教育の考え方をつくば市では明日の教育のトップランナーと言っていますので、そういうような走りになるようなことがいくつか具体的にできるのではないかと考えております。また、平成23年度につくば市は教育課程特例校の指定を受けていますよね。こ

れをもとにつくばスタイル科をやっているのだと思いますけれども、特別校に指定されていることを生かして、文科省と交渉していこうと考えています。まず一番私が注目しているのは、「ワールドオリエンテーション、テーマ学習とプロジェクト学習をどういう形でつくば市において導入していくか」ということを具体的に考えることが世界のあしたの教育のトップランナーの拠点になるのではないかと考えているところです。

市長：では、まずディスカッションの前に、本松先生や教育長の話の中で、分らなかったこと等の質問を伺っていくような機会にしましょうか。御質問があれば、どうぞ。

倉田委員：「全国統一テスト」という全国学力テストを行っているとは本松先生の説明と教育長の紙にもありましたが、この目的は何で、どのようにして行っているか。例えば、進路のアドバイスの参考にするのか、それによって評価して、方向性を導き出していっているのか。その振り分けやバランス、評価のあり方がもし分かればもうちょっと説明していただきたいです。目的意識をちゃんと持って進んでいるというのは、私もよく分かるのですが、そのバランスのあり方は、どのような現状なのかをお教えいただければ幸いです。

教育長：私の整理の26番に関わることではないかと思えます。当然のことながら、日本でいう学習指導要領のようなものがオランダにもあります。それをベースにしながら、CITOという全国学力テストをやっているわけです。二つの使い方があるのではないかと受けとめています。一つは、13歳以降のコースをどこにするかということの一つの判断材料です。それについては、26番に書いていますけれども、三つのコースに分かれていて、それぞれどういう分布でコース分けをされているかということ、職業学校コースが16歳までで大体6割、それから、二つ目の専門学校コースは17歳までの教育で大体35%から40%、残りの大学進学コースは18歳まで勉強して、大体5%弱です。このような中等レベルの教育をどのコースで受けるかということ判断する

一つの材料として、この全国学力テストは使われているということですが、その点数、成績だけで振り分けているのではなくて、先生方が、どういう子どもだということをきちんと見極めたものもベースにしながら、「君はこっちの方がいいですよ」ということを決めているということです。あともう一つの役割を言えば、文科省の期待している内容をどれだけきちんと実行しているかというようなことを見る判断材料にもなっているのではないかと考えております。

市長：大前提として、イエナプラン校もオランダの文科省のカリキュラムに沿って全部やられているということがあるということが、僕が現地に行って分かったことです。もっと特別なことをやっているのかと思ったら、「日本と同じように文科省が決めたカリキュラムをちゃんとやっている」と彼らは主張しています。では「どうやっているのか」ということを聞くと「例えば、子どもが朝骨折をしてきたら、まずワールドオリエンテーションをやる。『大変だったね。』で終わらせない。『骨ってどういうふうにできているのだろう。』あるいは『治療ってどういうことをしていくのか。』等をみんなにどんどん質問を出してもらおう。」ということでした。それぞれの興味に応じて、「君はこういうことを調べてみよう。」となると、先生は、それぞれの子どものカリキュラム図を描いて、「この子のこの疑問なら、カリキュラムのここに該当するから、これは履修したことにできる」ということをやっているそうです。下手したらこじつけですけども、子どもは自分で学んで、自分で疑問を持っているから、すごく一生懸命取り組むそうです。校長先生は、「使えるものは何でも使う」と言っていました。やはりある程度便利なものだから、全国的なずれというのは、進度を見ていく意味では、使っているそうです。ただ、成績表を出したり、通知表を出したりということは、一切しないといいます。更には、実はテストをしてもしなくても、大体の進捗というのは分かるそうです。日頃から生徒を細かく見ているから、先生がテストを

やってみて、この子はこんなに点数が取れると思わなかったとか、取れないと思わなかったということはないそうです。テストをなぜしなくていいかという、先生はテストをしなくても分かり、子どもたちも「あの子は何が得意、あの子はあれが苦手」というのをそれぞれが分かっている、教え合うようなことを言っていました。

教育長：少し補足すると、学習指導要領のようなものは確かにあるけれども、「何年生の何学期はここまでやりなさい。」という方法的な拘束性はほとんどない。むしろ二、三年前から、学校の自由裁量というか、「自由に活用してください。」となったというようなことも言っていました。あと日本も、終戦直後は参考資料として学習指導要領があったのですが、途中から法的な拘束力を持ってかなり縛りつけるようなことになっています。終戦直後の新しい教育のスタート時点では、あくまでも参考資料として使われていたような形の学習指導要領だろうと理解していいのではないのでしょうか。

倉田委員：あと、多様な考え方が非常に多く出てきたということでしたが、教師の役割として、どの辺までまとめていくのかということや価値観のようなものを共有させているのかというのが、分かりましたらお教えいただけますか。

教育長：私の理解ですけれども、20人とか30人いる子どもたちをある方向でまとめるというような意識はほとんどないのではないかと思います。とにかくこっちのベクトルで行っている子は、こっちをできるだけ伸ばそう、こっちのベクトルで進めることでこの子をこっちの方向で伸ばしていこうというように、それぞれどんな方向に伸びていったとしても、最終的にいい人生を送れるような人間になれば、それはそれで望ましいと考えてやっているのではないかというのは、コンセプトの一番大事なところではないかと思います。

市長：私も少し補足すると、実は、まさにそういう質問をしました。研修所の先生のところに行って、「今オランダは結構過激な極右的な首相ですが、そういうことというのは、授業で扱ったりするのか。」と聞いたら、「何でも扱

う」と言っていました。「何か排除や排斥をするようなことを主張する子どもがいたらどうするのか。」と聞くと「否定はせず、『ではどうしてそういうふうにするのか。』、『そういうことをしていたらどうなってしまうのか。』ということ問いかけていく。」と言っていました。したがって、タブーはなく、子どもたちが何を考えようと自由ですけれども、でも「やっぱりそういうことは望ましい社会の姿ではないよね」というものに対しては、きちんと問いかけをする。それから、本当に子どもがやってはいけないことに対しては、「だめなもののはっきりだめ」と言い、幾つかの使い分けをしているようで、例えば、「もう他の人種は虐殺していいのか。」といった話になったら、「それはだめだ。」ということは、はっきり言うと言っていました。

倉田委員：私もその道徳的なものもどのように教育していくのかというところが少し心配なところでした。ありがとうございます。

教育長：少し付け足すと、日本の先生は「政治的中立性をしっかり守れ」ということで、がんじがらめになっています。そのため、私の解釈では、最近の学校の先生方は、政治的な発言をほとんどしませんね。そういうことについて、ちょっと質問したら、「どんな政治的な発言でも、どんな発言をしてもいいし、場合によっては、運動をすることも禁止はされていません。」ということでした。

市長：今の道徳的な部分でいうと、イエナプランは20の原則がまずあって、こういう社会をつくりましょうといった基本理念があります。したがって、「公正であろう」や「平和であろう」などということが前提とされているので、おそらくそういうものをベースに考えていくのであり、何でもいいというわけではないです。その他いかがですか。どうぞ。

石川校長：私もこの会議に出るということで、視察に行った人のレポートをいくつか読んできました。なぜ急につくばがイエナプランというのを言い出したのかというのが、私がまず理解ができないところで、急に降って湧いたよ

うに「イエナプラン」が出てきたのです。出てきた理由は、おそらく何かつくばの教育に課題があって出てきたのかなとは思っているのですが、その辺が全く私たち校長たちは理解していないところがありまして、まずなぜ今イエナプランがここで出てきているのかというのを知りたいのです。また、1967年ぐらいからオランダで始まって、現在3%しかやられていない。50年もたつて3%しかやられていない教育をなぜ今ここでつくばが取り上げているのかというところもちよっと疑問に思っているところなのです。そういったところが、私たちも分からないと、なかなかこれからどういうふうに進めていくのか分からないので、なぜ今つくばでイエナプランなのだということを御説明していただければと思います。

市長：私から御説明します。もともと私は何年も前から注目はしていたのですが、それを今回総合教育会議の中でも、イエナプランという教育が今世界的に一気に注目をされ始めている、特に日本では注目され始めているということで、この総合教育会議のテーマとしました。なぜ注目をされているかという、私が考えるのは、やはり近代公教育の枠組みに対して、日本中で疑問を持っている人が今多いという前提があると思っています。例えば、一言で言えば、「一斉に授業をして、一斉に評価をしてというプロセスで本当に子どもたちが幸せになっているのか。」ということに対する疑問だと思のです。それは、あくまでも私の疑問でしかないのですが、この総合教育会議で扱いたいことというのを最初に聞きました。別にイエナプランありきではなく、イエナプランをこれからつくば市でやっていくと決めているわけでも何でもなくて、こういう議論を通じて、総合教育会議でどういうふうにしていくかということなのですけれども、最初に総合教育会議を始めたときに「『カリキュラムどおりきちんとやって、正解がある答えをきちんと出して、みんなが一斉にやって、そのルールを守ってやっていく教育』と『正解がないものもいろいろ対話をしながら、解決をしていって、答えがないところに

も、答えをつくっていくような子どもになるような教育』のどちらがいいですか」という質問をしたのです。そうしたら、事務局、傍聴者も含めた全員に手を挙げてもらったのですけれども、全員が後者の「自分で正解のない答えに対して、いろいろな対話をしながら切り開いていくような教育」を受けてほしいと手を挙げたのです。その次に質問をしまして、「今のつくば市の教育をそのままやっていけば、この皆さんの望む教育になると思っている方はどれぐらいいますか。」といたら、実質は1人も手が挙がらなかったのです。それがその場にいたみんなが感じていたことで、これがきっと課題なのだと思います。これは誰かを批判しているわけでも何でもなくて、先生方すごく一生懸命やられています。ものすごく忙しい中、自分の時間も削って、子どもたちがどうすれば良くなるかと一生懸命考えているわけです。それなのに、なぜ教育関係者も含めて、今のままで行ったら、望むような方向に行かないと思うのかということを考えないといけないと思います。ですので、総合教育会議で、例えば、「先生たちはなぜここまで忙しくなってしまったのか。」、「何を変えなければいけないのか。」ということを含めて議論をしているところです。これは森田教育局長ともよく話しているのですが、何を変えなくてはいけないかと言われたら、やっぱり文科省が変わってくれないときついのではないかというのが一つのアプローチとしてあって、こんなに「あれも教えろ、これも教えろ」ということで学校現場に負担を押しつけておきながら、「あれもやれ、これもやれ」と言われても、きっと無理だということをおっしゃっているというのが一つです。ただ、おそらく文科省が変わるまでには、何十年もかかると思うのです。その何十年間、我々は先生たちも苦しいまま、これだけ忙しくて、プライベートもないような状態にしてしまって、一生懸命頑張っているのに、会場にいた全員が望む教育にはつながらないというのは、やっぱり不幸なことであり、それは先生たちも絶対望まないだろうし、子どもたちも望まないだろうし、教育委員だって望まないと思うので

す。そうであれば、「つくばでどういうことができるか。」ということを考えていかななくてはならない。さっきも文科省のカリキュラムがあつて、それを守っていると言いましたけれども、今度新しく長野に初めて日本初のイエナプラン校というのできるのですけれども、そこの方が言っていたのは、「やっぱり文科省のカリキュラムどおりやりますけれども、教科書は質のいい参考書程度に扱い、それで子どもたちのための教育をしていきます。」ということ話を話して、それは実はつくばにも一つ大きなヒントになるのではないかと考えています。ですので、前回は校長先生との意見交換会をやって、教育委員から出たような意見に対して、校長先生が「そんなあれもこれもできない。私たちは文科省から言われたとおりにやっています。」ということをおっしゃっていて、そのとおりでと思います。先生方、すごく一生懸命やっていますけれども、現場の先生方も含めて、一生懸命やることに対して、もっとやりやすくなったり、やりがいを持ったりすることで子どもがもっと学びを進めていくような方向ができるのであれば、それはつくばとして当然取り組む価値があるだろうという思いで、今回、その一つとして、イエナプランというものに注目をしてやっていますが、イエナプランでなくてはいけなとか、イエナプランをそのまま入れるとか、何でモンテッソーリやダルトンではないのかとか、そんなことも話し始めたらたくさんありますが、今教育長が言ったように、イエナプランはコンセプトなのです。「子どもとはどういうものだ。」とか「社会とはどうあるものだろう。」等も含めて考えていく上では、これは別につくばに限らず、全国的にもヒントになるのではないかなと私は思っています。逆に伺いたいのですけれども、先生御自身は今つくばの教育というのは、特に課題は余りないなど、どんなお立場ですか。

石川校長：私はすばらしい教育をしていると思っているのですが、ただ課題としては、先日も問題に出た「電子黒板が買ってもらえない」や「タブレットが買ってもらえない」といったハード面の充実がなされていないところは非常

に課題であると思います。それが無いために教員は忙しくなってしまうというのは、すごく課題であって、校長会としてもいろいろな意見が出てきており、その辺が一番の課題かと思っております。逆にイエナプランの御説明を聞いた中で、やはり教職員の力量というのは、非常に必要だなと思いました。そのための研修もこのレポートを見ると随分やられていて、それをやることによって、逆に教員たちが大変な思いをするのではないかということをお私に危惧しています。その辺は教員の忙しさというのを取り除くことも大事だと市長も言っていたのですが、本当に教員、忙しいのです。その面では、こういった新しいプランを取り入れることによって、逆に教員たちが忙しくならないかなと今感じました。

市長：教員の多忙化というのは、おそらく何をするにしても改善しなくてはいけないことだと思うのです。ですので、今何で忙しくなっているかというのは、データで分析してもらっています。例えば、中学校の先生だったら部活が負担になっているというので、そういうのは外部指導員を入れていこうとか、今、谷田部東中でスタートしていますけれども、そういう形を使って行くであるとか、例えば、部活もつくば市では茨城県のガイドラインよりも厳しくしました。これは結局例外をどんどん認めてしまえば、保護者から「もっと練習をやってほしい。」ということが出てきて、負けてしまいますので、そうでなくて、つくば市の教育委員会としては、明確にしっかりと先生たちを守るために、総論賛成各論反対をしていてもだめだと思いますので、きちんと守ってもらうようなガイドラインにしていきたいです。それから、システムについても、やはりどういう形で校務用のソフトを入れていくかということを進めていますけれども、そういう先生方の事務の負担などは極力減らすことにしなくてはいけないなと思っています。ただ、ハード面の整備とやっぱり中身の議論というのは、別の部分として考えていく必要があるだろうとも思っています。どうぞ、先生方、あるいは教育委員の方。

教育長：若干補足してよろしいでしょうか。私の前歴が教育社会学という学問の研究者だったということは皆様御承知だと思いますけれども、我々教育社会学を研究してきている者たちの共通の理解というのは、今の公教育制度は150年前からスタートしたもので、その目的は経済成長あるいは産業社会の発展を担える人材、役立つ人間をどう選別し、活用していくかというようなことが主たるものでした。ですから、学校の社会的な機能というのは、教育社会学者が共通に言っていることですが、セレクション・アンド・アロケーションファンクションだという。選別と配分機能をしているところだということが、世界の教育学者たちがほぼ共通に認識していることです。イギリスの社会学者に言わせれば、こういう制度は、2033年には自己崩壊するでしょうというようなことまで言っています。学校というのは、まさに格差生成機能、格差そのものを生み出す装置として、存在しているのだということまで大阪大学の吉川先生という方はずばり言っています。そういうような認識を持って、これをこれからも続けていくのか、こういうような学校制度をそのまま続けていくのかといたら、やっぱりどこかで方向転換をしないと、社会そのものがもたないのではないかなと思っています。つくば市では、五十嵐市長は、「世界のあしたが見えるまち」をつくるということを唱えていますから、私はつくば市で「世界のあしたの教育のトップランナー」になるんじゃないかと。さっきもちらっと言いましたけれども、教育課程特例校というようなお墨つきをもらっていますから、それも活用しながら、どこかでそれを乗り越えていくようなことができるのではないかというふうに私は考えています。それで「なぜイエナプラン教育か」ということをいえば、イエナプラン教育について、相当前から私は注目していたことではありません。こういうような学校がありますよということは、市長から聞いて、ああそうかというので、いろいろ勉強することになったら、私が『社会力の時代へ』という一番新しい本に書いたこととほとんどコンセプトは同じだったと思っ

て、参考にできるところはできるだけ参考にしながらいかしておく方がよいのではないかと認識しています。

柳瀬委員：私は、シュタイナー教育を学生の頃から勉強して、実際に実践もさせていただきました。それは私学でできることであろうというふうに言われています。日本でも、シュタイナー学校が文科省の認証校になかなかないということは、カリキュラム等で折り合いがつかないからなのですけれども、市長は、イエナプランということで、こういうふうに勉強させていただいているのは、非常にいいところに目をつけられたなと思います。公教育でやれる話だと思うのです。シュタイナー教育は、いろいろなオルタナティブな学校という中の一つで、人間観とか宗教観とかいろいろなところでなかなか受け入れられない面がかなり強いのですけれども、このイエナプランに関しては、非常に教育の本質的なところを語っているので、現場がよく理解できると思うのです。もちろん電子黒板を買うことや教員の働き方、忙しさなんていうことは、問題がありますけれども、そのことを踏まえた上でも、これはもうすぐにでも実践の中でやれることだし、非常にいい提案だと思います。それをきっかけに、イエナプランを実践するというよりは、これを学んだ上で、現場の先生たちが、安心して、自分たちがやっていた教育というのは、こういう教育をやりたいと願っていたことは、やっぱりそれでよかったのだと、ますますそれを深めてもらえばいいことで、今の学校教育の現場を否定しているわけでは全然ないと思うのです。そこがイエナプランの一番いいところではないかなと思っています。したがって、何かモデル的なものをつくることはできるかもしれないのですけれども、やっぱり研修が負担になるとか、そういう意味でなくて、研修をして、教員が「楽になる。ああよかった、これで頑張っていくのだ。」というふうになっていくような研修を具体的に取り入れていくといいのではないかなと、そういうふうに考えます。

小野村委員：私もこの事業を進めていく上で、研修という言葉が非常にキーワ

ードになるのだと思いますが、実際に研修をやるから仕事が減るということは多分にあることだと思うのです。私たちも現職時代にも、そうやってみんなでやってきたことであるので、それはやりようでできるのではないかなと思います。ただ本当に先生がおっしゃることはとてもよく理解できますし、先生方が一生懸命頑張っていることも分かるのですが、ただ今ここで、新しい教育、これ今後の方向性を見出そうとしたときに、一度外に目を受ける必要があると思うのです。外に目を向けて、イエナプランでもシュタイナーにしても、そういったものをまた国内でも、先日私は石巻でしたか、雄勝小学校の実践の話聞いてきましたけれども、雄勝小学校でやっていることは、かなりこのイエナに近い、小規模校でもあるのですけれども、非常に参考になりましたが、そういった、ちょっと外のものをもう一度見て、そこでしっかり見ていくことが大事なのかなと。子どもたちを見る場合でも、まず研修と言いましたが、私はやっぱり言葉をかえれば、見ることから始めるべきだと思っていまして、今私たちに何が不足しているのかというところをしっかりと見ること、全部オーケー、オーケー、オーケーと見たのでは、何も進歩はありませんので、私たちに今何が不足しているのか、何がこの学校と違うのかというところをしっかりと分析するところから始めるべきではないかなと思っています。質問を四つほどさせていただきたいのですが、簡単に答えられると思いますので、まず一番目に、先ほど3%というお話がありました、この間私が見た資料でも6,000校のうち200校というものですか、これは現状でも変わりはないのでしょうか。

市長：変わっていないと思います。

小野村委員：それから、二つ目として、先ほどの様子を見ていて、本松先生のほうから、プリントを使っているというお話がありましたけれども、日本で言うところの自習とはちょっと違うかもしれませんが、子どもたちは、50分から50分の授業の間、いわゆる自学自習の割合が日本に比べて多いのでしょうか。

か。

本松指導主事：プリントが与えられているので、それを解くということです。

その50分のうち、10分くらいは習熟度だったり、その学年だったりというグループ単位で集められて、計算のやり方などを先生が指導する場面がある、そのほかはそのプリントにまた戻るといようなことなので、自分で解く時間という部分はかなり多いと思います。

小野村委員：分かりました。最後なのですが、これは二つに分けて聞きたいのですが、家族の協力ということで、協力的な家庭が多いというお話でしたが、まずこちら、門脇教育長の19番に学歴が概して高いという報告があったかと思えます。それと、こちらの皆さんの平均収入というのはいかがなのでしょうか。

教育長：高いです。

小野村委員：それと、これはたしか前にビデオで見たような気がするのですが、ワークシェアリングがすごく進んでいて、例えば、母親は週に3日、父親は週に4日ぐらいしか働いていないという家庭が多いと言っていました。そういう保護者の労働環境というのはどうなのでしょう。

教育長：確かに、ワークシェアリングは相当進んでいます。オランダの場合。だから、1人が延々と過労状態で働く人はいないのではないのかな。仕事を分け合いながらやっているということが現状。日本もそういう方向を目指すべきだと思います。

市長：先生方の時間というのは、本当に決定的に違うところだと思います。ですから、さっき校長先生が御心配になられたように、今のまま入れていったら負担という意味では増えると思うのです。先生たちに余裕がなければ、いい教育なんかできるわけがないのに、次から次へと増えてくる中で、やっぱり我々一度ここで立ちどまって、働き方のことも含めて考えていかななくてはいけないときは来ているのだらうと思います。先生が4時頃帰る等というこ

とは、オランダという社会全体でワークシェアリングが進んでいて、みんながゆとりを持って過ごしているというのが、これでも国家として動いているというのは、考えなくてはいけないということを我々が突きつけられているのだと思うのです。オランダが国家として崩壊しているのだったら別ですけども、みんながシェアをしながら、先生たちも4時に帰って、子どもたちも喜んでというようなことが起きているのであれば、やっぱりそこに学ぶものだろうと思います。一方で、やっぱりまだイエナプランは中学以上がないそうなので、子どもたちは、そこで従来型の公教育の洗礼を受けるそうです。それで、子どもたちは、すごく苦しむそうです。中学生が夜に小学校に帰ってくるらしいのです。先生は「大丈夫、また大学まで行けば、あるいは社会に出れば、また自由が手に入るから。」と励ますそうです。でも、余りそればかりやってもしょうがないので、今度はついに中学校を今後つくろうとしていると言っていました。イエナプランの中学校をつくっていくタイミングがいよいよ来ているというような話をしていました。だから、これはやっぱり社会全体としてゆとりがあるとしても、やっぱり公教育のその部分で、例えば、試験で全て評価される等についてはどの子にもきっと必ずあるのだと思います。

小野村委員：私は、基本的に、そのイエナプランからは学ぶことは非常に多いと思っていて、どんどん進んで学んでいくべきだと思っていますが、今日最初ちょっとびっくりしたのですが、市長がいきなりいろいろな市で導入が始まっていますと、一番を目指そうというような話が最初にあったので、もし本気だったら、これはかみつこうと思ったのですが、そういうことではない、今、名古屋も始まっていますよね。この間、宮崎でも何か大きい集まりがあったみたいで、本当に急にあっちもこっちもということで、ちょっとブームになりつつあって、ある意味危険かなということも思っていますが、逆に、やっぱりつくばで目指すべきは、一番初めに導入したのではなくて、一番よ

様式第1号

い形で導入したと言われるように目指すべきであって、そのために、今日こうやって皆さんが集まって、話しているのだと思います。そういう意味では、今日伺って、別にお世辞を言うつもりはなくて、うちの市長でよかったなということも思いましたし、この中で、別にイエナプランという名前にもこだわる必要はないと思いますし、ただ、何が違うのかというのをこれからみんなと一緒に見ていけたらいいのかなと思います。それで、私なりに、何が違うのだろうと思って、私自身がショックを受けたことなのですが、この中で後ろのほうで何度か、この間私が見たビデオの中では、何回もその言葉が出てくるのですが、イエナプランがどういう学校ですかというと、子どもたちを幸せにするための学校ですということを言うのです。最初は、それを私も結構当たり前だと思ってスルーしていたのですが、よく考えると、子どもたちの笑顔のためですとかという言葉もたくさん出てくるのです。そのときに、ふと思いついたのが、日本の子どもたちの自己肯定感の低さということを考えてときに、自分自身が子どもたちの笑顔をふやそうという気持ちが言葉では分かっていたつもりでしたけれども、どれだけできていたのかなと考えたときに、結構私も後ろを追っかけ回すような教育になっていなかったかどうかということを考えて、もう一度そこは見直すべきでないかなということを感じさせられたということです。

市長：ぜひ、先生方が今日いらっしゃっているので、どんな順番でもいいし、私が指したほうがいいのか、どうぞ。何もきれいごとはここでは要りませんので、どんどん自由に本音でお願いします。

大高校長：やはり我々学校で一番大事にしていることは授業なので、プレゼンの中でもあった子どもたちが進んで勉強している姿だとか、自分で調べて先生が回ってくるまではじっとやれている子どもたちであるとか、こんな姿を紹介していただいたものですから、そこはすごいなと思って見せていただきました。ですから、やはり自主性や主体性を伸ばすということを大事にされ

様式第1号

ているのだろうなと思ったのです。我々も自ら学ぶ力というのは、今までも育ててきたつもりですが、皆さんがおっしゃるように、日本の教育にはなかなかそういった面でも課題がたくさんあると思っています。ただ、現状として、オランダでできていることですから、日本ではできないことはない、今の教育制度の中でもできないことはないのではないかなと自分は思うのです。そのオランダの子どもたちは、自ら学ぶという時間の中で、何を頼りに自分の学習を進めているのかというところに非常に関心を持ちました。先ほど、教科書は参考書程度と言っているというお話もあったのですが、それでも教科書が頼りなののでしょうか。それとも、その他の図書なののでしょうか。パソコンの情報なののでしょうか、それとも、ときどき回ってきてくれる担任の先生なののでしょうか。それとも、一緒にグループ、ファミリーグループを組んでいる異学年の友達なののでしょうか。そういったところを現地での様子をお聞かせいただけたらありがたいと思います。

本松指導主事：校長先生がおっしゃるとおり、子どもたちがプリントに取り組んでいるだけなので、私など自分の経験から見ると、これで、言葉は悪いかもかもしれませんが、学びが深まるのだろうかといえますか、子どもたち同士の教え合いで、どれくらい学べるのか、プリントの答えを丸つけて、先生に提出してチェックしてもらおうということで、十分なのだろうかというのは感じながら見ておりました。普段先生方は、日本ですと、グループの中でも、子どもたちに考えさせるなど先生が導いていく場面、見通しを持って導く場面もたくさんあるので、そういうところをつくばのクラスで学びが深まっている授業をたくさん拝見していますので、疑問に思ったところでもあります。ですので、子どもたちは、自分のクラスの担任の先生が最初にしてくれるインストラクションといえますか、こういうふうに計算をするのだとか、そういうことをまず受けて、自分のプリントに戻るわけなのですが、そこで分からなかったらグループの年長者に聞いてみるとか、グループの中でも、それが

様式第1号

得意な子に聞いてみるという場面はあるのですが、そこでどのくらい突き詰められるのかというのは、疑問を持ちながら見ているところでした。

市長：基本的に行われていることというのは一緒なのですけれども、私が見た印象は、多分そこが一つのイエナプランの肝なのだろうなということは感じました。異年齢との学びというのが、大きなイエナプランの特徴ですけれども、教えるという行為というのは、単に学ぶよりも、おそらく教える側にとって学びが多い行為なのだと思います。下の子に分かるように伝えるという行為によって、本人の理解というのは、より深まっていっているのだろうなということが、おそらく1点あるのだろうと思います。今、先生のお話にもありましたけれども、得意な子に聞くと、校長が言っていたのですけれども、イエナプランというのは、誰かが何かを知らないのは当たり前だということが徹底してやられるそうなのです。それは、学年も違うわけですから、下の子が知らなくても、何もそれを恥ずかしいことに思わないで、素直に上の子に聞ける、上の子は教えるという、そういうことを通じて、誰がどういうことを得意かというのをみんなが教室の中で知っていくというのは、これは魅力があるものだなと私は思いました。同時に、イエナプランは、誰かが何かを知らないのは当たり前と同時に、誰かは何かを知っているというのものもあるそうなのです。ですので、その人の強みとか、自分自身の得意なものって何だろうというのをかなり徹底して突き詰めていく中で、自分はこれができるよというようなことが強く育っていくのだろうなということを感じたので、学びは深まっているだろうなという印象を受けました。これは多分、先生とは、見ている視点が、先生の視点で見れば、もっとこうすればいいのにとか、これは当然教えるプロフェッショナルですからあると思います、それは当然いいことだと思うのですけれども、子ども同士の学び合いの、しかもそれが同じ学年ではなくて異年齢ということで、「そんなこと知らないのか。」ということもないですし、聞くのは恥ずかしくない、教えることで深まっていく

というようなことは、すごく価値のある時間なのです。ただ、ドリルをやっ
て、丸をつけているだけではないと思いました。決して、先生の見方が違う
と言っているつもりはありませんので、多様な考え方があると思います。

教育長：学力に関する考え方が決定的に違うのではないかと思います。学力。

日本だと、教科の中身をどれだけ理解しているかということで学力が高いと
か低いと言っていると思うのですが、そうではなくて、私は、ケーパビリテ
ィーを高めるということをずっと言っています。自分がこういうようなこと
ができるようになるとか、こういうような生き方ができれば幸せな生涯を送
れるというようなことを、自分の力で実現できるような力をまずつけてあげ
る、それで、たった1人でそれはできるわけがないから、お互いに協力し合
いながら、お互いにいい関係をつくりながら、あの人はこんなことを実現し
たがっているのだなということが分かれば、それを実現していくために、力
を貸してあげる、お互いにね、それが社会力だと思っているのです。だから、
社会力を育てることとケーパビリティを高めるというようなことが、これ
からの教育の核にならないといけないのではないかと思います。「誰々君が
誰それ君よりも何点上だ、下だ」というようなことにこだわる必要は全くな
いのではないかと思います。とにかくどんな子も、障害を持っていよう
がいまいが、どの子もこういう人生でよかったというような人生を送れるよ
うに、そのために教育は力を注ぐべきではないかと思います。そういうこと
を書いたのが『社会力を育てる』という本で、私の考え方をそこで書いてあ
ります。

市長：オランダで先生って何をするのだという話をしている中で、もう一から
十まで教える必要はないと聞きました。むしろ、先生は子どもを離す必要が
あるのだという説明をされました。離すというのはどういうことだというの
で、イエナプランではペンを離せば落ちるという離し方ではない。手のひら
を上に向けてちゃんと支えられるようにペンを置いて手を開けば、離してい

るけれども、何かあれば、またつかんで指示を与えて、でもずっとぎゅっとつかみっ放しだと子どもは動けなくなってしまうのだと言っていました。だから、離して行って、子ども同士の学びを深めさせていくと学ぶということは楽しいのだということを教えていく必要があるのだということを言っていたメモが今ちょうど出てきました。どうぞ、順番は問いません。お願いします。

横山校長：今お話を聞いていて最初に思ったことが、今の日本の社会に子どもたちを送り出すわけですけれども、その大学入試や高学歴を望む保護者たちが多い中、これを全部取り入れていったら、不安が増えてしまうのではないかという思いを抱きながら、実は聞いていたのです。ただ、先ほど、市長がこれをそのまま取り入れるわけではないというお話や教育長が参考にできるところは参考にしたいというお話を聞いて、ちょっとほっとしたところです。実際、このイエナプランの説明で、身につけさせたい力、イエナプランで重視すること、もっともなことだと思いますし、日頃やっているつくばスタイル科にも非常に共通するところだなということを思いました。では、実際、イエナプランを少しずつ取り入れるというふうになった時に、どんなところでできるかなという現実的なことを少し考えてみました。例えば、本校でいえば、大人数過ぎるので、全部がこのような形にはならないにしても、縦割り活動をこれからやっていくわけですけれども、何か課題になったときに、私たちがこうだと与えることと子どもたちにその課題を投げかけて「どうしたらいいかを考えなさい」ということは、結果的に同じことが出ても、全く子どものその次の行動が違うのです。そういうことなのかと自分では理解しているところなのですけれども、また、その縦割りでも、必ずしも上の子が下の子に教えられるとは限らないのです。実際同学年で学習とかをしても、理解が難しいお子さんもいまして、いかにその子たちに対応し、その子を救ってあげるのか、そういうことに奔走している毎日であることも事実な

様式第1号

のです。ですので、いろいろな方面から、利点とそれから課題をしっかりと出した上で、今のつくばの教育がさらに発展するためには、どこをどのように取り入れたらいいとか、そういう方向で議論をしていく必要があるのではないかなということ強く感じました。

教育長：逆に質問したいのですけれども、つくばの教育が発展するというのはどういうことですか。

横山校長：先ほど課題として挙げられていることがいくつかあったじゃないですか。つくばの教育を変えていかなくてはいけない。そういうことを解決していくということですね。あるいは、最終的には、社会を切り開いて社会に貢献できるような子どもたちを育てていきたいという思いがありますので、その方向に向けて、まだ十分でないところをみんなで考えて進めていくことだと私は思っています。

教育長：私が言っている社会力とほとんどダブることですかね。もちろん人と人がつながって社会をつくる。更にベターな社会はこういう社会であるべきだということを考えて、考えたことを実際に実行していくというのが社会力の一番目玉だと考えているわけですがけれども、今先生のおっしゃることを聞いていると、社会力を高めて、社会を良くすることだと。

横山校長：社会をよくする子どもたちを育てていくということは大事なことだと非常に思います。ただ、やっぱりその何ができるのかとか、それから社会の要望だったりとか、子どもの思いだったりとか、そのところはやっぱり十分考えながらやらないと、プランありきで現実がついていかなくて、やってみたものの不具合で、ああこれは失敗したなど、失敗ってやっぱりなかなか許されないものなので、子どもたちと日々接していると。なので、やっぱり慎重に議論していく必要があるのではないかなということ強く思います。

市長：おそらく保護者も変わらなくてはいけないと思うのです。いい点数を取

って、いい学校に行つてというものは、実はもうそんな方向でないことはみんなが分かり始めていながら、それを手放せないわけです。現実には、つくば市で若手職員に将来ビジョンを描かせたのでけれども、もうつくばは良い大学行つて、良い会社行つてという旧来のプチエリートコースとは別の概念を提示しましょうという提案を若手職員がしていました。おそらくつくばの目指す教育はそういうところで、社会に対して新しい概念を提供しました。そうは言つても、先生方は、「いや、受験の勉強をもっとさせてください。」とか、「点数を上げさせてください。」と言われると思います。でも、だからこそ、教育大綱でつくばの目指す方向というのは、もう書き込む必要があると思つています。それは、時に価値観の転換を求めなくてはいけないのかもしれないと私は思つています。従来型のコースでは、もう社会はよくなつていかないというわけです。当然批判も出ると思つています。「もっと受験勉強をさせてほしい」、「テストの点数を上げてほしい」という保護者からは批判は出してしまうと思つていますけれども、その批判は、最終的に私が選挙で受けるということになりますので、それはもう仕方がないという覚悟で私は思つています。先生の最初のコメントに戻ると、やっぱり問をどのように共有するかというようなことは、徹底して意識されてきました。ティーチングをする場面とコーチングをする場面とがあり、やはりコーチングという概念について、このペーター・ペーターゼンもすごく考えて意識をしていたそうです。正解は子どもたちの中にあり、子どもたちから引き出していくのが、グループリーダーである我々が「先生」と呼んでいる人たちの仕事であつて、何でも教え込むということではもうないという概念というのは、すごく強く感じました。

柳瀬委員：ちょっとだけ口を挟ませていただいてよろしいでしょうか。さっき、本松指導主事の報告でも、最後に「自己有用感を高める教育が大事である。」と結論を言つていたような気がするのです。一方で小野村委員が「自己肯定

感」と言われたと思うのです。自己肯定感と自己有用感というのは、ちょっと慎重に分けて、きちんと考えた方がいいと思うのです。自己有用感というのは、ある意味で「俺は役に立たない」、「俺は勉強ができないからだめだ」と役に立たないというコンプレックスを裏に含んでいるわけです。自己肯定感というのは、「あなたそのままでもいいのだよ」というだけではなくて、「あなたのよさをもっと引き出しましょう」という感じなので、その二つをちょっとうまく現場で使い分けてほしいと思いました。

横山校長：先ほどの市長の話、とても理想的なこれからの姿かなというふうに思います。ただ、教育をしていく上では、理想だけではやっぱり目の前の子どもたちに理想だけ掲げて進めることはできないので、やはり現実を見たところ、先ほど石川校長がおっしゃったように、働き方改革や教材、機器の問題等は切り離せないと思います。そこも含めて、どうすれば一番いいのかという議論にしていかないと、難しいかなと思うのが現実です。

市長：少し電子機器の予算の話をしていいのですか。まだしてはいけないのですか、局長。

教育局長：まだです。

市長：分かりました。では、すみません。議会での議論なんかも含めながら、先生方の思いには応えられるようにどの学年だったらいいかといったことの議論を重ねて予算は今つけていきたいと思いますので、ちょっとお待ちください。

横山校長：待っていれば、大丈夫なのですね。

市長：すぐというのは御期待に応えられるとは思っていませんけれども、上のほうの学年が随分使いやすい環境になるかと思います。そのあたりでちょっとこれだけで御勘弁いただければ。すみません。

小野村委員：子どもたちのニーズというお話がありましたけれども、本当にそのニーズというのをしっかり捉えていくことはまさに必要なものであって、こ

れをしっかりと確認していくべきだと思いますが、確かだと思いますが、またその考え方を変えていかなくてはいけないところもあるのも確かだと思います。その一方で、やっぱり今本当にニーズってすごい多様化していると思うのです。このイエナプランの中でも、イエナプランは、やっぱり研修とかにかなり時間をとられるので、なかなか増えないというような声を私は見に行っていないので分からないのですけれども、いろいろな人に聞くと、やっぱり数が増えない理由としては、教師のスキルが非常に必要とされるという理由を挙げる人が多いのですが、その一方で、イエナプランをそんなに増やそうとはしていないのです。オランダ全土をイエナプランにしましょうという考えは多分この人たちはなくて、イエナプランが合うと、自分たちの子どもには、イエナプランのような教育をしたいなと思う人はイエナプランを選んでくださいというような発想なのだと思うのです。今、市内においても、全国的に見て、確かに今の日本の公立学校には行かせたくないというような意見も実はあるわけです。私の気持ちは今でも教師のままなのですが、筑波西中学校というところに最後、母校なのですが、勤務したときに、私は英語なので、英語の授業を一生懸命やっていました。行ったら、みんな褒めてくれるだろうなと思ったのですが、結構批判されました。うちは農家なのだから、うちの子どもに英語なんか教えないでくれと言われたことが本当にあったのです。何件か。先生のせいで、うちの子が勉強に関心を持ち出して大学に行きたいと言い出して、これで帰ってこなかったらどうするの、先生のせいだからねと言われて、実際その子は出て行ってしまったのです。それは、自分が、やっぱりニーズを、その子が出ていったこと自体がいいか悪いかはともかくとして、私とその家庭のそのおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんの気持ちを理解していなかったということは事実であって、そういうところもしっかり考えなくてはいけないし、今正直私はSTEMという言葉が余り好きではないのですけれども、STEM、STEMって言っ

ているけれども、私は今住んでいる田中のニーズは農業後継者なのですよね。やっぱり地域のことを考えたら、農業をしっかりやってくれる若者も絶対に必要なのですけれども、今の学校って、そういう意味では、農業から離れてしまいがちな教育を、少なくとも私はしてきたのです。よく風聞で、実際そういう話があったのかどうか知りませんが、市内の某中学校で、勉強をしないとああいうふうになってしまうのだよとって、農作業している方を指差したというような話が地元ではずっとうわさのように、誰が言ったのだから分からない、多分それは事実ではないと思いますが、でもそういううわさがずっとあったのです。でも、これからは、食糧難のことでいろいろ考えたときには、私たちはもう1回そのニーズというものからしっかり考えていかなくてはいけない、だから、先生がおっしゃったように、そこからやっぱりみんなまで話し合っていくことが一番必要なのかなというふうに思います。

市長：つくば市では、ちなみに、STEMとは言わずに、必ずSTEAMとあって、そこにアートを入れていますので、むしろこのSTEMよりも、アートの部分を生かすことで、ほかのことにはかなり効果があるだろうというのは、いろいろなエビデンスがありますので、アートの部分をしっかり入れていきたいなとは思っています。

小野村委員：そうですね。そこも取りようだと思うのですけれども、ここに日経ビジネスから抜き出したものがあるのですが、ここではAIが人間の能力を超えるシンギュラリティーが来て、この先、人はAIがロボットを使う側と使われる側にいや応もなく選別されるというのがここに書いてあるのです。そんなこと絶対ないと思うのです。人が使われるAIは売れないので、人が使うAIは売れると思いますけれども、でもやっぱりこういう不安を今いろいろなところであおられている中で、やっぱりみんなでそこを何がこれから本当に必要なのかということをしつくり考えていく、それがここの集まりの価値なのかなというふうに思いますけれども。

市長：本当に、例えば、農業の価値を伝えられて、農業をやりたいなと思うような子どもが出てくることはすてきなことだと思うのです。多分、イエナプランで言うとそういう機会がワールドオリエンテーションで、いわゆる教科学習をするのではなくて、極端に言うつくばではつくばスタイル科を授業の半分ぐらいやっているイメージなのですかね。簡単に言えば、学年によってかもしれないけれども、今は週に、1、2コマですが、それが週に十数コマという話になってくるということかと思います。そうするときと農業の話も環境の話も地域の話もできる。ただ、今の状況では、そんなことは文科省のカリキュラムではさすがにそれは無理だろうと思いますけれども、例えば、社会や数学も農業にこじつけてしまうということを相当やらないといけない。

岡野校長：私、今日参加させていただく上で、視点は一つだったのです。つくば市が今進めている教育とイエナプランは何が同じで何が違うのだろうという見方でお話を伺わせていただきました。市長がおっしゃった現場の先生は一生懸命やっているというお話は、本当にありがたく伺っておりました。つくば市は、小中一貫教育を進めていく上で、いろいろな施策をやってきたと思うのです。小中をつなぐために、これも必要、これも必要、それで現場は大分忙しくなってきたのです。でも、今この時期、そのいっぱい広げた風呂敷を1回すぼめて整理して、次のステップに行くという時期なのかなと考えております。それでイエナプランなのかなと。今日お話を伺って、似ているところは何かのだろうと思って伺っていました。本松先生がプレゼンされた身につけたい力、これはつくばの目指すところに似ているなと思いました。

教育長：つくばスタイル科の4分類、12の力はまさに社会力ではないか。

岡野校長：まさに社会力だと思っています。あとファミリーグループ、これも異年齢で3学年、これをつくばが4・3・2で今区切っている。でも、これをこの後編成はどうすればいいのだろうと考えました。今、つくば市が、区切

っているものをどういうふうこれから変えていけば、ファミリーグループになるのだろうと考えました。あと、教育長に示していただいた5の(4)、一言で言えば、徹底して子ども一人一人の特、これがやっぱり大事で、個に応じたということをして日本もたくさん言っているのですけれども、なかなか難しい現実があって、やっぱり授業力向上、授業を魅力的にするために、課題の提示はどういうふうにしたらいいのだろうと、その課題をどういうふうにつくっていけば、子どもたちに合うのだろうと今試行錯誤してやっています。つまり、いろいろ同じところもあるし、今つくば市の改善するのはどういう視点なのかというのを、今日は勉強させていただいて、ありがたく思っています。その中で、一つ、イエナプランの身につけさせたい力というのは七つあったと思うのですが、本松先生の資料の中で、教科との関連というお話があったと思うのです。スクリーンの中で、その七つの力に、例えば、教科とかいろいろ書いてあったと思うのです。それがそれぞれの教科の特性にリンクさせているのかどうかというのは、気になったので、それを教えていただければなと思っております。また、グループリーダーが何人編成になっているのか、それが複数であれば、どういう役割があるのかとか、そういうものを今の教育にどう役立てられるのかなと思っております。本日はありがとうございました。

本松指導主事：七つの力の具体的な姿ということの話だったと思うのですが、先ほどのスライドでお見せした表は、教科との、こちらのものはワールドオリエンテーションの学習で、いろいろ調べる中で、自分は歴史とか、地理的な分野に、もうちょっと知識が必要だと思えば、その学習を進めるし、文章、国語的な分野で自分の学習が足りないと思えば、読み書きの教科学習をするときに、熱心に取り組めるだろうということの動機づけになるというふうなお話でした。相互にリンクしているということでした。こちらの表は、子どもたちの姿から、七つの力が身についたかどうかを判断するものです。小さ

くて申しわけないのですけれども、自分の学習目的を決めることは、企画力にあてはまります。こういう行動をしていると、この力が身についているという、具体的な行動を細かく示したものです。グループリーダーは、学級担任のような存在なので、30人いれば、そこにグループリーダーは1人、学級担任がグループリーダーという認識で見えておりました。グループリーダーは教員です。

木村校長：私もほかの校長先生からお話があったとおり、イエナプランとつくばの教育の違いとか、それから何か取り入れられることがあれば、どういふふうに取り入れたらいいのかという視点で聞かせていただきました。いろいろ説明を聞かせていただいて、やはり本校の中で特に特別支援教育、特に発達障害系のお子さんたちもおまして、それから各学級にはグレーゾーンのお子さんたちもいます。そういう子どもたちに対して、教員側も丁寧に準備をしながら、配慮しているわけなのですけれども、本当に一人一人の学びというものを深めていく上で、やはり特別支援教育にはかなり個別の指導をきめ細かくやっていかないと、そういう子どもたちがこういった異学年、異年齢のグループ編成の中でやっていく際には、戸惑うことも出てくるのではないかなと感じたものがありました。こちらの視察された学校では、そういった配慮を要するお子さんたちというのは、こういったグループの中に存在していて、何か特別な配慮をしているような状況というのがあったかどうかを教えていただければと思ったのですが、いかがでしょうか。

市長：いました。やっぱり集団でやるのが苦手な子は、ある意味逃げるようなスペースがあって、1人になりたいときは、本当に1人になれるような場所が何か狭いところとかあって、実際行ったときも、廊下なんかでやっている子がいましたし、ヘッドホンつけている子もいましたし、本当に配慮はされているなど。一つ印象的だったことがあったのですけれども、案内してくれた子どもが教えてくれたのですけれども、ちょっとかっとなってしまいう子

様式第1号

がいたのだと、去年。それはいわゆる発達に課題があったわけなのですけれども、ちょっとからかわれると過剰反応して、いじめられてしまったと。去年この学校ではいじめがありましたみたいなことも書かれていたのです。そこで何をしたかという、校長先生は、いろいろ話し合いをさせて、子どもたちにその子を守るチームをつくったそうなのです。校長先生ががっつやるのではなくて、子どもたち自身で、その発達障害のある子を守るチームをつくって、結果として、いじめがなくなったそうなのですけれども、そこまでやるのかと思いました。もちろんそれは危険のあるような部分、とめるということはちゃんと先生たち見ているでしょうけれども、そこまで徹底して、ある意味子どもを信頼してやっていって、かつ発達に課題がある子たちも含めて、それこそ究極のインクルージョンなのかもしれませんけれども、子どもたちの中で生活をさせているなというのは、ちょっと日本でそのままできるかと言われれば分かりませんが、でも、そういうアプローチも一つあるのだなということは感じました。

木村校長：そういった生活面の様子も見ながら、子どもたちのかかわりを持たせて、その課題から今度は自分たちで解決する方策に至ることだと思えます。それだけではなくて、学習面などは、先ほどプリントで自学の時間がという話もあったところなのですけれども、そういった学習支援に対してなどは、何か特別な支援がされていたのでしょうか。

市長：その瞬間だけでは見えませんが、先生は、いろいろやっているときも、細かく見ている感じはしました。何か子どもたちを集める機会という、いわゆる何十人に一斉授業というのは一切ないのですけれども、少人数で指示を与えるときは、もう三、四人とかのテーブル、四、五人とかのテーブルで指示を出したりしていますので、かなり気をつけて見ているという印象は受けました。ただ、ずっとつき添って見ているかという、そういう感じではないと思いますけれども。

様式第1号

木村校長：そこはやはり、少し自分で学習ができるようなそういった流れを酌みながらですか。

市長：そうですね。そういう発達にいろいろ遅れがあったり、課題があったりする子には、それに合わせたプランをつくっているということだと思いますけれども。本当の重度の子というのは、行った学校ではい wasn't でした。

小野村委員：前にビデオで見た中では、結構重度なお子さんと学校、校舎が、日本でいうと特別支援学校と通常学校が並んでいるようなところも見ました。そういうところはどのようなのですか。

市長：ちょっと名前は忘れてしまいましたけれども、そのイエナプランスクールと公立の特別支援学校と何かを一緒につくるような動きもできているようで、そこでは、チームを組んで、常に特別支援学校とイエナプランスクールが行き来をしているようなところもあるそうです。ただ、我々が行ったところはそういうところではなかったです。

倉田委員：確認したいのですが、イエナプラン教育もつくばの教育も目指す方向性というのは、同じ考えだと、公教育も私は同じだと思うのです。みずから学ぶ力とか、主体的に考える力、そういうことを育成するためにどうしたらいい、そこまでのプロセスをどうつくり上げていくか、その中で、つくば市のオリジナリティーとか特性とか特徴を出していくということが、私は今後検討していくものであると思うので、その点は基本目指す人材育成というのは変わらないと私は思っているのです。

教育長：確かに、思考力だとか表現力だとか、こういう力をつけましょうというふうに文科省も言っています。創造性を発揮させましょうとか。これはだから、何のためのそういう力なのかということは、決定的にやっぱり違うのではないかと私は思っているのです。さっきも言いましたけれども、産業社会にこれから経済成長を続けていくために必要だから、そういう力をつけるというのが本音であって、その子の幸せを実現するために、そういう力をつ

けるというようなこととは違うのではないかと、私ははっきりと違うと思っているのです。そこをだから、どのどんな子どもでも、どの子どもでも、ある方向を向いているのをこっちに来いとか、あっちに曲げろとかいうのではなくて、その子の目指している方向、それぞれ違うベクトルの方向で真っ直ぐできるだけ伸ばしていくことによって、その子なりの幸せな人生を保障してあげるということを目的にしているか、経済成長のために役に立つような力をつけるようなその力なのかということの違いは明確に仕分けながら、我々は対応していかなければいけないだろうと常に思っています。岡野先生、さっき私の5番目の(4)のところを大事だとおっしゃっていましたがけれども、一人一人の特性、能力の違いとか、望みの違いとか、意向の違いとか、こういうさまざまな違いをそのまま丸ごと認めた上で、その子なりの幸せを実現してあげるというようなことのために、一教師として、私は頑張ると、そのために私は頑張るのだというようにいわゆる教師としての心構え、心構えは、これはその先生がその気になれば、今でもすぐできることだろうと思います。いい点数を取らせてあげるためにやるのではなくて、その子なりに幸せな人生を送るために、私はこの子を徹底的に面倒見るのだというような考えで教壇に立つ、児童生徒とかかわりを持つ、こういうことは制度の違いとか何かではなくて、そういうふうに腹を決めた瞬間から先生はできることだと思っているわけです。

倉田委員：今、教育長が言われたとおり、まさしくそうだと思います。今まで、高度経済成長の中で、社会で役に立つ、求められる人材育成をしてきたのが、今までの公教育だと思うのです、日本の。ある意味では、そのときには必要だったかもしれないですけども、これからの日本の日本人ということのあり方としたら、それはもう時代おくれで、もう到底受け入れられる状況ではない、私もそう思っています。ですから、日本もだんだんそっちの方向に、個人尊重の意味では、シフトをしていると私は思っているのです。そういう意

味での公教育のあり方ということで、文科省でも検討してくれているのだと思っ
ているので、そういうことはやっぱり私たちが純粹に受けとめて、考え
なくてはいけないという、そういうことでどうしたらいいかと、一人一人の
人材育成をどうしたらいいかということを真剣に考えていけばいいのかなと
私は思うのです。だから、その中で、協同というか、全体でつくり上げていく
というか、みんなで協力していく体制とか、そういうものをもう一度見直さ
れる時期になっているのかなと、その大切さ、そういうことを気づかせてい
くというか、個性も当然そう、個人個人特徴もそうですけれども、それも尊
重しながら、集団の中で、この一つの中でつくり上げていかななくてはいけな
いから、尊重ですよ、それも。そういうものもやっぱり今後一番の課題。そ
れ、つくばの教育の中でそれをどうしたらいいかというか、どうつくり上げ
ていけば、それが達成できるかということをやっぱり今後真剣に煮詰めてい
く必要があると思うのです。教育長が言っていることは、私はもちろん当然
そうだと思ったのです。

鈴木委員：今日は、なかなかお話を聞くことができない校長先生たちがいらっ
しゃったので、よく話を聞こうと思って最後まで黙っていました。横山先生
がさっきおっしゃったように、倉田先生も教育長もおっしゃったように、時
代が変わってきて、目指すところが違って来たのではないかと、公教育の。だ
けれども、この平成を失われた何十年なんていうように、いつまでも高度成
長の影を、私たちのちょっと上の方々が引きずるように、私たち親の世代も、
偏差値教育の時代に生きてきて、いい大学に入れば、いい生活ができるみた
いな影を落として今引きずっている。そうすると、高校受験のことを考えな
ければいけないというような理想と現実のはざままで、先生たちが悩んでいる
ということは、本当にそうだなというふうに思いました。あと、また岡野先
生がおっしゃったように、あれもやる、これもやると大分風呂敷を広げたの
を一度すぼめて、考え直さなくてはいけないというのは本当にそのとおりだ

なというふうに聞きました。そこで、昨日、ちょうどきのうですけれども、文科省の教育委員の研修に行っていました。分科会の中でワーキングのような9人ぐらいでお話をする場がありまして、文科省の担当の方が、その分科会の内容よりも、最後に、特に強調したかったようなのですが、働き方改革をどうぞ大胆に進めてくださいというようなことをお願いされました。教員志望をする方が、学生が、こんなに減ってしまって、もう今、どうにかしなければ、教育現場が大変なことになるのだと。私もそのとおりだというふうに思いました。なので、どうしても先生方、熱心に、あれもこれもやっぱり必要だというふうに思ってしまうのもそうなのだろうかと、本当にそう思うのですけれども、つくば市としても、もうちょっと大胆にできるところはないのかなというふうに感じています。そこで、また文科省の講演で聞いてきたのですけれども、環境教育をやれと環境省が言うてくる、国税庁が税の作文を書けと言うてくる、消費者教育をやれと言うてくる、いろいろやってくるけれども、どうぞ思い切って捨ててくださいというふうなことをおっしゃっていました。私もそうだなと思って、何を取るのかは、その時代とその地方自治体の地域性とで選んでいいのだなというふうに、あ、そうかというふうに思って帰ってきました。そこで、教育課程の特区になっているのですか、そうすると、見ていると、やっぱり現場は、あれもこれもやらなくてはいけないということで、そのシステムの中でどうしても一つ一つが少し深まらないということがあるので、どうにかその特区のことを利用して、捨てて、大胆に捨てて、もうちょっと一つのことを深めてやっていく、それで、深めてやっていけば、子どもたちは学ぶ方法をそこで身につけて、その後環境教育だの何だのというふうにおのずと目が向いていくのだと思うのです。そういうふうには、システムを変えていけないかなというふうに、強く思っています。

教育長：そういう方向で考えています。

市長：それはありがたい発言ですね。むしろ教科よりも環境教育等をやりたい

などと思いますけれども、それはそれとして、やはり「カリキュラムをこなす、消化する等というのは、それでいいのか」ということは、やっぱり誰もが思っていると思います。本当にこれは市役所の仕事でも同じですけれども、多少批判を受けたりしても、やらないことを決めていくということをしないと、このままではもたないだろうと思います。先生方は本当に限界まで頑張ってくださいっていると思います。その中で何を切っていくかというようなことを先生方1人でやるのは大変だと思いますので、「つくば市の教育はこのように選んでいきます」ということを示していく必要はあるだろうと思います。ただ、学校の自主性には入っていきたくないの、学校にはできるだけ自治を持ってもらいたいと思っています。学校の先生方は、御自分たちの判断で「これはやめよう」と判断できるようなバックアップを行うなど、皆様からいろいろな御意見をいただきながら、今度校長会からも初めて要望という形をいただきましたし、それに対しては、全部応えたいと思っています。最初にも言いましたけれども、イエナプランをそのままやるとか、コピーするとかではなくて、イエナプランはあくまでコンセプトだと思います。それをどう入れるかということです。最後に一言だけつけ加えますと、イエナプランという名前は、ペーター・ペーターゼンは、つけたくなかったそうなのです。イエナという町で学会発表をしたから、イエナプランという名前がついてしまって、その創始者は「人間の学校」という名前にしたが、全然広まらなかったそうです。さっきから出ていますけれども、やっぱり「子どもの幸せということは何だろう」ということをとにかく向こうでは何度も言われました。日本では先生こそむしろ今非人間的なぐらい忙しくて、つらい思いをされていますので、先生方が生き生きしていないと、子どもたちが生き生きしないと思います。逆に、オランダの先生方は生き生きと子どもに自信を持って接していたという状況がありましたので、その部分については、働き方改革に本腰を入れて、我々もやらなくてははいけないと思います。逆に現場でお気づ

様式第1号

きの点とかあれば、これはやめようというのをたくさん提案してもらった方がいいのではないかなと思いますので、そういうコミュニケーションをこれからも校長会の先生方やいろいろな職層の先生方と繰り返し、ちゃんと対話をしながら、進めていきたいと思います。イェナプラン教育に関して最初やることは目指しません。本当に、一番いい教育を日本でしていくことが我々の目指すところなので、ぜひこれからも御協力いただければと思います。

一緒に頑張っていきましょう。今日はどうもありがとうございました。

事務局：次回の総合会議は、2月下旬を予定しております。また詳細については、御案内させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

以上。

平成 30 年度第 8 回つくば市総合教育会議次第

日時：平成 31 年 1 月 24 日（木）

13 時から 15 時まで

場所：庁議室

1 開会

2 市長挨拶

3 内容

オランダにおけるイエナプラン教育の視察報告

4 閉会

事務局：総務部総務課

：教育局教育総務課

オランダ イエナプラン視察

H30.11.4-11.9



イエナプランとは？

(1) 身に付けさせたい力

①起業性（主体性）

②企画力

③協働性

④創造力

⑤プレゼンテーション

⑥リフレクション（振り返り）

⑦責任感

イエナプランとは？

(2) イエナプランで重視すること

- ① 経験：体験してみる
- ② 発達：良さを伸ばす
- ③ 社会や世界に目を向ける
- ④ 協働
- ⑤ クリティカルシンキング
- ⑥ 意義のある学び

イエナプランとは？

(3) 学習・生活集団について

○ファミリーグループを基盤

・ 4才～6才

・ 7才～9才

・ 10才～12才

○家族のような環境

○互いに学び合い社会性を育む

○3年間同じ担任

イエナプランとは？

(4) 基本の活動について

私たちの教育の4つの基本活動

Our education has four work forms:

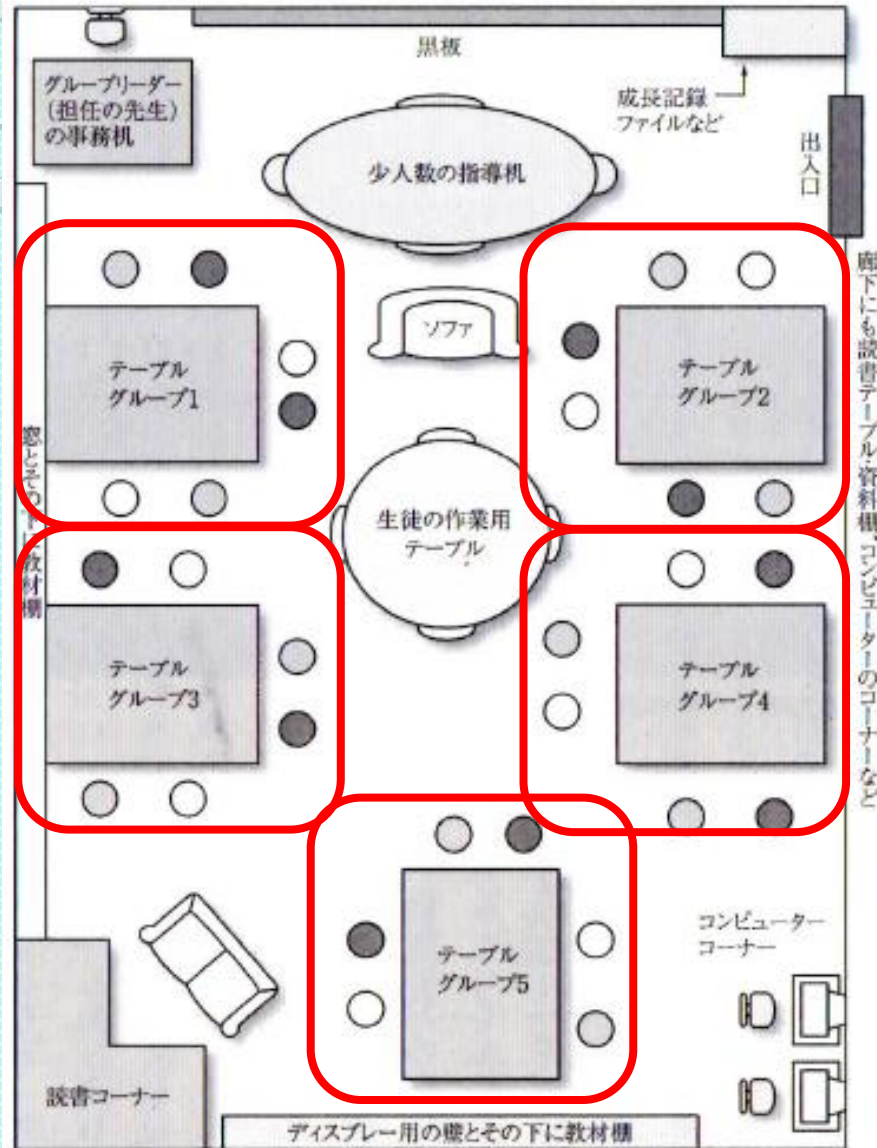
- サークル対話 Conversation
- 遊び Play
- 仕事(学習) Work
- 催し Celebration

4つの活動の方を組み合わせでリズムミクな週の
計画を立てる

With these 4 elements, a Rhythmic week plan is formed.

イエナプランとは？

(5) 教室環境について



○教室
=安心できる場所
































○異年齢の子どもで
グループを作る

○情報検索やドリル
学習用PC

イエナプランとは？

(6) 学習の進め方について

○ブロックアワー（教科学習）

Rekenen paalsommen T48 s 1 	lezen woord 	lezen a b h f e 	Taal Tekstenboek 	lezen Kleine klanken 	taal werkblad lidwoorden 	29-10 opmerkingen: 
schrijven Letter a 	lezen boom room loom zoom 	Rekenen T47 s 2,3 	lezen a b h f e 	lezen Squa letters 	doel 	30-10 opmerkingen: 
schrijven Letter g 	Rekenen pijlentaal T48 s 2,3 	lezen letterblad 	lezen a b h f e 	lezen Leesspel uit de mand 	rekenen WIG 4.5 	31-10 opmerkingen:
schrijven Letters herhalen 	lezen woord 	Rekenen T49 S 1,2 	lezen a b h f e 	motoriek Motoriek: kralenplank 	taal tekstenboek zin maken op de letterdoos 	1-11 opmerkingen:
Lezen boom room loom zoom 	lezen flits 	lezen Leesspel uit de mand 	lezen lees- instructie 	rekenkoning 	2-11 Voor volge	

イエナプランとは？

(6) 学習の進め方について

○ワールドオリエンテーション (プロジェクト型学習)

- 問いをもつ
- 調査方法を話し合う
- 調査する
- 結果や考えを共有する
- プレゼンテーションを行う
- 振り返る

イエナプランとは？

(7) サークル対話について

○自己表現や他者理解の場

○朝の予定確認

○振り返り

○ワールドオリエンテーション



訪問校について

(1) 11月6日 (火)

De Pandelaar

- 238人が在籍
- 農業地区
- 児童は年々増加
165人 (2004)
252人 (2019)
- 近隣の町からも

